経済と経営 *21−4* (1991. 3)

〈論　文〉

ある金細工職人の遍歴

松　田　　緝

1

ヴィルヘルム・トロイエ Wilhelm Treue 編集の「文化史資料集」„*Quellensammlung zur Kulturgeschichte*“ 第13巻は，ヴォルフラム・フィシャー Wolfram Fischer の「ドイツ手工業史資料」„Quellen zur Geschichte des deutschen Handwerks“ で，「宗教改革時代以降の自己証言」„Selbstzeugnisse seit der Reformationszeit“ という副題を有し，その中に収録されている金細工師年代記 Goldschmiede-Chronik の 1543 年の記録は次のように始まる。「この 1543 年にわれわれの父も彼の最後の旅をして，10 月に死んだ。彼が今度は最後のときが来たと言った時，彼は多くのおやすみと祝別と共に皆に別れを告げた。そのとき彼は最後まで私の手を握っていた。こうしてわれわれの父はこの世を去って，彼の救い主，彼の父と兄弟の許に赴き，現世を永遠と取り替えた。けれども彼の教えと戒めは今日まで生き生きとわれわれの心に残っている。更に彼にとり特に慰めであったことは，ペトルス Petrus が春彼の許に居たことで，その時彼はブーゲンハーゲン Bugenhagen 先生の勧めでグライフスヴァルト Greifswald の大学に教師として来ていた。」[1)]

1）Wolfram Fischer, *Quellen zur Geschichte des deutschen Handwerks,* 1957, S. 32.

この記録の筆者ヴォルフガング・ヴィンツェンツ Wolfgang Vincentz はブレスラウ Breslau の金細工師で，1524年の生まれだから，この時は19歳であった。ペトルスは彼の兄弟である。彼の父に関する記述は続く。「われわれの父は若い頃，ニュルンベルク Nürnberg，ラインのケルン Köln am Rheine，またブリュッセル Brüssel とアントウェルペン Antwerpen にいて，これらの町の多くの特色を知っていた。そこで先ず彼に分かっていたことは，僧侶たちの聖遺物の大きな欺瞞で，特にケルンではキリストを叩いた笞，また1万1千の聖女と3博士の骨が大いに敬われている。彼は曾て親方の許で70人以上の聖人の聖遺物入れの箱を造って，すべて関節，髪，歯，内臓，血痕のように模造金箔，木と針，釘と鉄片が箱の仕切りに嵌め込まれたから，細工の欺瞞は全く明らかだったので，それゆえわれわれの父は欺瞞と坊主細工について知ったことを熱心に小冊子に記した。彼は良い金細工師でなかったならば，確かに立派な市書記になったであろう。彼の誠実と口が固いことの故に，彼は旦那方と話している時，彼に多くのことがうち明けられた。と言うのは，われわれの父はいろいろと苦労もあった過ぎし年月のあらゆる商売取引及び事件がどのように起こったかのこういう記録で以て，何ら特別に騒ぎ立てることはなかったが，過去のことについて，またブレスラウではどうであったかを知りたいと願う多くの者が彼の所に来たのである。事件を面白おかしく，また豪勢に物語る技術よりも，こういう知識を高く評価する多くの人びとがいたのだ。とりわけ，われわれの愛する父は鉱山について多くのこと及びシュレーズィエン Schlesien ではどんな状態かも知っていたが，彼の鉱山株からは僅かな利益しか得られなかった。」[2)]

以上の記述からわれわれは，ヴォルフガングの父がブレスラウの金細工師であり，ニュルンベルク，ケルン，ブリュッセル及びアントウェルペンを遍歴したことを知る。職業柄聖遺物匣の製作に携わった彼がカトリック僧侶の

---

2) W. Fischer, *ibid.*, S. 32−33.

欺瞞の裏面に通じていたことは，彼と家族の宗教的態度に影響したことを推定させる。父親の記録癖は息子のヴォルフガングに受け継がれた。父についての記述は更に続く。

「高齢で彼はもう余りラテン語を解せず，古代人の歴史，彼らの芸術，行動及び経験をもうラテン語で読めないことを彼はよく悔やんだ。これを彼にたいていペトルスが読んで聞かせて翻訳しなくてはならなかった。とりわけわれわれの父は学習に勤勉熱心な子供たちに対する喜びを常に有し，彼のすべての手紙にそのことを書くのも忘れなかった。著作者と学者がこの世の支配者になるとも考えていた。私が学校に上がった頃，愛する母は死に，私は先ず習い，静かに坐り，ゆっくりと読み，格言詩を話し，それから奇麗で上品な書法を習得しなくてはならなかった。そこで父は日の暮れ前にわたしたちの間に座り，左側にペトルス，そしてわたしは右側で，それと並んで文法，図画及び算数の学習の際にはポーゼン Posen 出身の若いメルテン・シュレーターMerten Schröter がいた。その後ハンス・ヒーロ Hans Chilo 先生がわれわれに詩を教えたが，私の頭は兄弟のペトルスほどそれに向いていない。このペーターは父にも手紙を，幾つかはラテン語で，熱心に書いたので，彼の喜びは大きかった。」[3)]

此処に学問を重視し，ラテン語を尊重する，教育熱心な父親の姿が示されている。記録は次に徒弟時代に移る。「それから父は私を環状道路のヴォルフガング・ヴェスターマイヤーWolfgang Westermeyer 親方に徒弟に出した，金銀のベルトのすぐれた親方で，鎖や真珠を付けた精巧で優美な首飾りも製作して，あらゆる打ち出し細工の親方である。今父が亡くなって初めて私は，この徒弟修業がどんなに私のためになったかを考えた。私が徒弟になって3日目のことだが，親方はこう言った，金を選別して集めよと。そこで私は磁石で鉱石を導いて，父の許で見たやり方で金鉱石を塩と灰汁と一緒に坩堝に

3）W. Fischer, *ibid.*, S. 33.

入れたが，こういうことは普通一人前の職人がやることなので，私は驚いた。材料が沸騰しそうであったが，金属は未だ坩堝に見つからず，攪拌棒は未だすっかり金色の球に付いていたので，私は親方がとびつく前に塩を加え，それはうまく行って，私はそこにどれだけの金含有があるかを認めた。このヴェスターマイヤー親方は金含有に鋭い目を有して，職人が来て作業を尋ねると手を貸した。だが彼は盗癖のある職人を寄せつけず，よくこう言った，万事整頓しておくことはやはり，盗癖のある職人が仕事場から金粉を欺くのを防ぐ，と。彼はまた信用できぬ職人の操作も即座に見抜いて，金も作業の前に計量し，削り屑は台から袋に入れてその都度彼に渡されなくてはならず，そしてずるく混ぜた真鍮の削り屑を調べるために分金液をよく使った。彼の良い優秀な仕事の他に，古い金を精錬する精確迅速な技術も有したので，純銀と純金だけが後に残った。何故なら金が純粋でない時は，熔解液は白く輝かずに被層を有し，更に幾らか硝石と共に加熱されなくてはならず，こうして銅が燃焼して流出する。そしてこの技術は古い親方たちには以前は困難であって，彼らは白い金と赤い金を熔融して3つの異なる金しか有しなかった時も，それは合金であって，うまく行くことは難しかった。」[4]

こうしてわれわれは，ヴォルフガングが父の同業者である優れた金細工師の許に見習奉公に出されたこと，また彼が既に父の許で習い覚えた技術が普通の徒弟以上に有利な立場に彼を置いたことを知る。1543年の記録は年間の家計費の集計で終わる。「この過ぎ去った年に家計は私の父に，彼が記したように高くなって，次のようにかかった。5人分の食費164グルデン，ビール及び奉公人用の安い飲みもの26グルデン，ぶどう酒7グルデン，旅費及び宿泊費23グルデン，新しい衣料品44グルデン，医療費4½グルデン，慈善及び書籍代6グルデン。」[5] 書籍代の費目が計上されている点に金細工師ヴィン

4）W. Fischer, *ibid.*, S. 33−34.

5）W. Fischer, *ibid.*, S. 34.

ツェンツ家の特色を見ることができよう。

2

続く1547年の記録は，23歳のヴォルフガングが遍歴職人としてボローニャBologna で働いていた記述から始まる。ここで述べられている「一切のことは，私が母と幼い弟マルティーン Martin のためにイタリアから故郷に赴く前に生じた。当時私は遠くボローニャに滞在し，僅かな賃銀でボッカ Bocca と呼ばれたジャコモ Giacomo 親方の許にいたので，帰郷の旅費を集めることはドイツの職人には骨の折れることになる。それゆえ私は憂鬱だった。ボローニャは立派な邸宅と美しい街路を持つ実にすばらしい町で，全く驚くほど高い塔もその間に在り，広く知られた学校も有し，また良いぶどう酒といろんな気晴らしにも欠けていないが，シュレーズィエン人には其処は長い間には気に入らず，またイタリア人は滅多に信用ができない。」[6] ヴォルフガングは先に学校に上がった頃母が死んだと述べているから，此処で記されている母は父の後妻であろう。ボローニャは美しい町だが，シュレーズィア人が長く居る処でないとしたヴォルフガングは，彼らのイタリア金細工師に対する関係を次のように説明する。

「イタリアの金細工師は皆，シュレーズィエンの職人や徒弟を，逃亡している者でも喜んで採用する。だが彼らがそうするのは，イタリア人職人の日ごとの盗みのためで，それは其処の金細工師の許では筆舌に尽くし難く，毎日計量されぬ金削りの場合には滅多に捉えられない。だが盗みは銀箔の場合に特に大きい。親方が厳しいと彼らは熔解に亜鉛屑を投入するので，彼は長い間無駄に作業してやり直しをしなくてはならず，かんかんに怒る。それゆえ親方たちはシュレーズィエンやドイツの職人を実に喜んで採用し，初めは

6）W. Fischer, *ibid.*, S. 34－35.

全く彼の機嫌を取って，立ち去らぬようにワインをもてなしたり，時にはイタリア人女中で彼を家に引き留めておこうとし，こうして親方は彼によって顧客が与えられる，これが親方の将来のもくろみなのである。」[7] すなわちヴォルフガングによると，シュレーズィエンとドイツの職人がイタリアの金細工師に歓迎されるのは，イタリア人職人の盗癖のせいだというのである。さらに彼は独伊の国民感情について，こう述べる。

「そこにはドイツ国民の良い職人，また学生も少なからず居るが，イタリア人との争いが多く，彼らとの永続的平和はない。何故なら彼らは自分たちは万事においてより洗練されていると主張してわれわれを愚弄し，また神は彼らにのみその功績に応じて思慮を与えたが，ドイツ人には愚鈍を与え，手先が器用なだけで，全世界のあらゆる芸術と学問は専ら彼らによって生まれたと誤信している。誰かドイツの職人が故郷のわれわれの許で妥当であるような控え目な返事を彼らにして，誰も自堕落な僧侶や坊主を恐れぬこと，われわれは何でも公然と自由に語れること，そして昔のドイツの皇帝と君主がイタリア人を幾度も懲らしめたことを言おうものなら，やれやれ，彼らは弾けんばかりに，かっとなって夢中になる。イタリアの若者は大抵勇気がないから，路上や町の外で多数を頼んでドイツの職人や学生を後ろから襲うのが彼らのやり方だ。だが通常彼らの年輩者の中には，金属細工仕事，武器製作，宮殿建築，肖像画及び図案に多くの器用な人びとがいる。彼らの大学の教師たちは，他の人びとも言うように，皆法王の偽善が好きで，高慢であって，われわれの学者とは違っている。」[8] ブレスラウの金細工職人が当時イタリアにおいて，ドイツ人としての自覚を如何に強く有したかが此処に窺われる。ヴィンツェンツは更にイタリアの手工業親方に対する不満を記す。

「多くの手工業においてドイツの職人はイタリアで全てひどい仕打をされ

7）W. Fischer, *ibid.*, S. 35.

8）W. Fischer, *ibid.*, S. 35.

てる，そういうわけで親方は彼と賃銀を取り決めて四半期であるのに，親方は清算をせずに支払を延ばそうとする。多くのドイツの職人がそういう目に遇っている。親方たちはそこで賃銀を遅らせるように彼らを説得し，そして期限が過ぎてから半額を出す。そこでドイツの職人は賃銀の件でイタリアの親方を相手どって訴訟を起こすことができるが，それは長くかかって遂には飢死することになろう。だがこういう欺瞞的な親方が彼のごま化しの儲けをひそかに喜ぼうとした時，ちゃんと利子をつけ耳を揃えて仕返しされることが多い。だからイタリアで働く時はドイツ人の職人が多くいる土地が最善で，其処では彼らはその権利を容易に守れる。」[9] すなわちドイツの職人はイタリアの親方の欺瞞に対して団結で対抗したのである。

さて，われわれの主人公ヴォルフガングはボローニャを去ることになる。「それゆえ私は喜んでボローニャに背を向けることができると考えて，ドイツ出身の更に2人の善い職人が一緒に行くのが見つかるまで待って，背嚢と剣を身に付けたが，それは私よりもジャコモ親方にとって一層辛かった。こうして私はまた，先ずヴェネツィア Venezia に移った。その後，私は法王勢力のこの地からボーツェン Bozen への道を行き，Vinschgau に入り，Rechenscheideck と Füsen へ向かい，Cadore とインスブルゥク Innsbruck に赴いたが，此処にはイタリアよりも気だての良い人びとが多く居て，安くて良いワインも手にはいる。其処では私の後ろに高いアルペン Alpen があったが，その中で森が未だ緑なのに憐れな旅人が吹雪で命を失うことがよくある。」[10] ボーツェンからインスブルゥクへの彼の道は，エチュ Etsch 川を遡ってヴィンチュガウ Vintschgau に入り，レシェン峠 Reschenpaß を越えて，イン Inn 川を下ったものと思われる。遍歴職人にとってアルペン越えの旅は，矢張り難行であったことがヴォルフガングの記述から窺われる。

---

9) W. Fischer, *ibid.*, S. 35−36.

10) W. Fischer, *ibid.*, S. 36.

3

「その後私は再びアウクスブルク Augsburg へ移った。ああ，何たる美しい楽しい町なことか！　其処には，ブレスラウで銅及びその他の物で大金を儲けているフガーFugger 氏が店を持っていて，そこでは国王や諸侯が彼の大金を求める時，彼の常連の得意先なのだ。」[11] ヴォルフガングが「再び」と記したのは，彼がイタリアに赴く前にもアウクスブルクを訪れたからであろう。彼がアウクスブルクに来た前年，1546年末のフガー社の財産目録によると，ブレスラウ支店の勘定は資産109,082グルデン，負債582グルデンであった[12]。1547年2月に社主アントーン Anton が支配人たちに送った数通の手紙は，ハンガリア業務から手を引こうという彼の意志を明示していたが[13]，1546年末の貸借対照表の金額が同社の決算書のうちで最高であった事実には変りはない[14]。

だがアウクスブルク市にとって，この1547年は苦難の年であった。前年の12月22日に帝国都市ウルム Ulm が皇帝カール5世 Karl V. に降伏して以来，皇帝はシュマルカルデン同盟 der Schmalkaldische Bund に加担した帝国諸都市を皆「財布で罰する」„im Säckel strafen“，すなわち多額の贖罪金を課するだろうと予想された[15]。1547年2月1日にアウクスブルク市参事会

---

11) W. Fischer, *ibid.*, S. 36.

12) 拙稿「アントーン・フガーの企業と時代（18）」，『経済と経営』第15巻，第3号，1984年，22，30頁。

13) 「アントーン・フガーの企業と時代（19）」，『経済と経営』第15巻，第4号，1985年，63頁。

14) 「アントーン・フガーの企業と時代（18）」，21－32頁。

15) Götz von Pölnitz, *Anton Fugger*, 2. Bd., Teil II, 1967, S. 327.；「アントーン・フガーの企業と時代（17）」『経済と経営』第15巻，第2号，1984年，50頁。

はウルムに在る市の使節団に対して，降伏に関する一切の問題はアントーン・フガーを通して処理するように指令した。アントーンは2月9日に市当局に対し和平会談の中間報告を送り，皇帝の要求した20万グルデンの罰金に対し，これを15万グルデンに減額し，大砲と火薬及び砲弾の引渡しをその差額に当てることで了解が成立したと報じた。皇帝は当初シュマルカルデン同盟に対する罰金の総額を1,776,000グルデン，アウクスブルク市に対しては30万グルデンと予定していたので，アントーンが苦労して達成した和解条件は決して不利なものではなかったが，「破滅的なフガー家の平和」„verderblicher Fuggerschen Frieden“に対する市民の不満は大きかった[16]。カール5世は4月24日ミュールベルク Mühlberg の会戦でシュマルカルデン同盟の指導者ザクセン選帝侯ヨハン・フリードリヒ Kurfürst Johann Friedrich von Sachsen を破って捕虜にした。7月3日に皇帝は，帝国議会をアウクスブルクで9月1日に召集する旨を布告し，7月23日に勝者としてアウクスブルク市に凱旋入城し，ヴァインマルクト Weinmarkt のフガー邸に宿泊した。この帝国議会はスペイン軍が周囲に集結していたので，後に「武装帝国議会」„der geharnischte Reichstag“と呼ばれた[17]。

「此処アウクスブルクで私は金細工師クリストフ・ケペラーChristoph Käppeler 氏を尋ねたところ，彼は私を息子のように迎え，彼の許には短期間しか居なかったが，彼らは私に大層親切だった。このケペラーはバーゼル Basel で友愛団 Fraterherrn と呼ばれる兄弟団に若い時から入っていて，僧侶や坊主を軽蔑し，敬虔に神に仕えて，聖霊の7つの賜物が浄福に導くと言う，即ち賢明，敬虔，分別，勇気，洞察，中庸，畏敬と無邪気な愛である。彼らは皆善良な篤信家である。」[18] ケペラー親方は福音派の敬虔な信者であ

16) 「アントーン・フガーの企業と時代 (19)」42, 53, 57, 59頁。

17) 「アントーン・フガーの企業と時代 (20)」『経済と経営』第16巻，第1号，1985年，86頁。

18) W. Fischer, *ibid.*, S. 36.

り，それは続く次の記述に一層明白である。「親方は1冊の古い帳面を持っていて，それには当然多くの人びとに知らせるべき正しい貴重な教訓として敬虔な兄弟のいろはが記されていた。」[19]

「ケペラー親方の意向に私は従わなくてはならず，そうしたが，それは私がイタリア人とドイツ人の違いを再びよく知ったからで，もう一度4か月喜んで留まった。」[20] こうしてヴォルフガングはアウクスブルクのケペラー親方の許に留まることになり，此処での職人の思い出が記される。「だが私と一緒にヴェネツィアからやって来たヴォルフ・ライシャヒャーWolf Reischacherと名乗る男はガラス絵師で，シエーナ Siena から来て，其処とローマでも働いていた。と言うのはイタリアではドイツのガラス絵師は特に愛好されていて，イタリア人に劣らぬ数のドイツ人が其処でこの仕事をしていたが，フランデルン Flandern とブラバンド Brabant 出身の者が特に優れていた。このヴォルフ・ライシャヒャーはバーゼルの学校教師の息子で，魚座の性格のように，粘液質で，冷たく，湿っぽく，水っぽく見えたが，茶目気を一杯隠しており，多くの経験を積んでいて，実際悪賢い悪戯者の安宿で，彼ら自身に対する嘲弄を，彼らがそれと気づかぬ中か，気づかせないで，うまくしっぺ返しをすることを知っていた。また彼らがこの隠しごとで彼を非難した時，彼がよく言ったことは，よいラウテ弾奏は愚者を敬遠して用心さるべきである，さもないとこういう愚か者の間で直ぐ濁らされ台なしにされるだろう。そういうわけで私はこのライシャヒャーと友達になり，その後も長く文通して仲良くしていた。」[21] ここに一見鈍重だが，内面は才気煥発な友人の姿が描かれている。

「いつも私は職人の間では可成り楽しかった。なお多くの善良で経験を積

---

19) W. Fischer, *ibid.*, S. 36.

20) W. Fischer, *ibid.*, S. 36.

21) W. Fischer, *ibid.*, S. 36−37.

んだ職人が居り，上手なラウテ奏きもいたし，シュトラースブルク Straßburg の主な職場の自由な兄弟達に味方して，皆剣に銀飾りを付けている。彼らは幾人かのフランスの金細工師の杯の作品をアウクスブルクとウルムに持って来た。こうして杯が造られ，面白い仕上げで，雄鳥，曲がった角，梟及び白鳥，或るいは熊やライオンなどの大きくて精巧な作品であったが，幾つかは船，風車及び銃，幾つかは僧と尼である。職人たちはライン，シュトラースブルク，またヴィーン Wien，同じくフランデルン及びイタリアと，彼らがやって来た処から多くの良い知識のみでなく，陽気な馬鹿騒ぎと悪ふざけも其処へ齎し，経験の浅い不機嫌な旧教徒などがやって来ると，彼はじきに教育された。」[22] 金細工職人の剣につけた銀飾りは彼らの連帯の印しであった。シュヴァーベン Schwaben の杯はシュトラースブルク径由のフランスの作品の影響を受けたことが語られる。アウクスブルクの金細工職人の仲間はイタリアのみでなくヴィーンとフランデルンからも来たことが分かる。彼らの間では不骨な旧教徒は良い鴨にされ，陽気な悪ふざけが楽しみであったことが語られている。

4

こうしてヴィンツェンツのアウクスブルクの職人生活は楽しかったが，彼はやはり故郷に帰ることにした。「けれども私は故郷のブレスラウに対する大きな郷愁を抱いた。ケペラー親方は親切にも更に1金グルデンを私に贈ってくれた。彼は曽て貧しい若い職人としてラインからやって来て，親方の奥さんと結婚したので，彼ら両人はその幸福と満足の故に多くの若い金細工師に親切を尽くした。」[23] アウクスブルクの金細工師ケペラー親方も，親方になれ

22) W. Fischer, *ibid.*, S. 37.

23) W. Fischer, *ibid.*, S. 37.

るチャンスの少ない手工業組合によく見られたように，親方の末亡人と結婚して親方になった経歴の持主であった[24]。「こうして私はその後殆んど危険なく旅を続けたが，それはひとえに，私を多くの危険から救い給うた恵み深い神様が最後まで私を助け給うたお陰に他ならない。」[25] こうしてヴォルフガングは彼の帰国の旅の無事を，神の恵みとして感謝した。

「さて私が再び故郷に無事に着いて，ブレスラウの塔や家の上で日光が実に快く照っていた時，3人の乙女が父の家の前にいた。ハンス・ブキシュHans Buckischの娘マクダレーナ Magdalenaとハニシュ Hanisch博士の娘たちノーエミ Noemiとデボーラ—Deborahで，隣人の白い鳩に餌をやっていたが，私を見て成功を祈って，ご機嫌宜しくと言い，もう翌日にはハンス・フォム・バウムガルテ Hans vom Baumgarte親方から厚遇された。」[26] 故郷に着いたヴォルフガングは娘たちとの出合いを楽しく記す。西欧の大都市で修業を積んだ職人はブレスラウの親方に喜んで迎えられたのである。

「そしてこうなったのは，私がアウクスブルクで働いたからである，というのは其処には金細工の新しい技術が登場して，特に優美な細かい葉飾り，薄い細紐及びその他の愛らしい装飾を曲げたり捻ったりしてはんだづけする技術で，またいろいろと秘密に守られた技法もある。従ってメヘルン Mecheln出身のハンス親方の仕事台も，みごとで多くの細かい細工の故にやがて私に気に入ったが，それはブレスラウやシュレーズィエンの多くの紳士，諸侯や貴族から親方に注文されたものだ。というのはこの頃ブレスラウには普通，余り口やかましくない顧客しかいない。大抵の紳士は金銀細工をニュルンベルクやアウクスブルクの旅行中に買って，ブレスラウの金細工師の多くは最美で最高価の作品を実際に造れるにも拘わらず，安い仕事や特に安い宝

---

24) Arthur H. Cole, *Business Enterprise in its Social Setting,* 1959, p. 108.

25) W. Fischer, *ibid.*, S. 37.

26) W. Fischer, *ibid.*, S. 37−38.

石の細工の注文しか彼らに残らない。イタリアやアウクスブルクとニュルンベルクの金細工師の許でのような大きくて見事な宝石は，以前よりはずっと稀にしかブレスラウに来ず，それは親方たちに余りに長く引き出しに入れられていて，近年中に彼の宝石が高く支払われるだろうかどうかを知っている金細工師はなかった。だから多くの職人はブレスラウでは滅多に大きくて美しく透明な宝石を手にすることはなく，アントルフ Antorf やブリュッゲ Brügge から来る新しい，念入りに研磨されたダイヤモンドは全く僅かしかシュレーズィエンに齎されない。」[27] ここにはブレスラウの金銀細工需要の不利なことが記されるが，問題は需要面だけに在るのでなかった。

「だが宝石を磨くことが稀だと，この作業は彼に困難となり，均整に仕上げられることは殆んどない。それについてはアウクスブルクに迅速極まる技術を持った宝石充塡師がいて，私はそれを見た。彼はヨハネス・ハルティヒ Johannes Hartig と称し，特別の好意から私に作業台で幾つかを教えた。大きな作品のために多数の宝石が必要とされ，多くの小さなエメラルドやサファイアが色とりどりの場合，彼は精彩のない石をきらきら光るように彩色も出来，それが彼の秘密であった。宝石をこのように嵌め込むことができて，並んで非常に美しく輝き，仕事に非の打ちどころがなければ，彼は良い腕で多くの仕事をした筈だ。だが多くのエメラルドとダイヤモンドが研磨で割れて，損害を充塡で埋め合わすのに手こずる未熟な者は，彫刻刀と締め台をうまく操作できないが，その仕事に巧みな技術を持つ親方は安い宝石を使った彼の作品を容易に高く売って，彼の高価な仕事で良い儲けを得ることができる。それを目指して私は仕事する積りだ。」[28] ヴィンツェンツの遍歴修行が，故郷の町では習得できぬ多くの新技術を彼に教えたことが分かる。

翌 1548 年の記録の中でヴィンツェンツは，ブレスラウで金細工師に打撃を

---

27) W. Fischer, *ibid.*, S. 38.

28) W. Fischer, *ibid.*, S. 38.

与える布告が出たことを語る。「そこで参事会は国王の命令により金鎖の携帯を禁止し，参員会員にのみ許し，一般の市民及び同職組合員には銀鎖と2つの指輪だけが許されるものとし，銀の鞘も全く禁止されることになった。それゆえ融通のきかぬ参事会では，美しい金の大きな鎖は大抵は既にわれわれの先祖によって，いざと言う時の財産として注文され携帯されたもので，必要な時には屢硬貨にされたことをすっかり忘れて討議したようだ。だからこういう馬鹿気た禁令は長くは行われず，先祖からの金鎖を持っている者に大損して売るように押し付けることはできない。時がそれを教えるだろう。」[29] もちろんヴィンツェンツは金細工職人としての彼の立場の利害を忘れてはいないが，遍歴職人として諸都市の経済の動きを見て来た彼にとっては，ブレスラウの参事会員の旦那方の経済観念は笑止なものと思われたであろう。

5

続く1551年の記録はこう始まる。「この年に私はプラハ Prag，ニュルンベルク，そして再びフランクフルト・アム・マイン Frankfurt am Meine に赴いたが，それはブレスラウでは金細工師がもう多過ぎて，幾人かは痩せた鼠を飼わなくてはならぬから，親方資格を更に数年待つべきであることに気づいたからだ。従兄弟の白鞣し工メルテン Merten は旅行胴着にと上等の鹿皮を私に贈ってくれた。これは途中，狼が近くに居ない地方で，宿に遠く，野原が寝台で，夜空が掛け布団である処では特にすばらしい。こうして私は，人づき合いの良く経験を積んだ，上手なラウテ弾きでもあり，その中にはマルクスフェヒター Marxfechter と言う者もいた，3人の良い職人と一緒に，シュヴァイトニツ Schweidnitz を経てプラハに行った。其処では父の旧友ハンス・ゴルトシュミート・アン・デル・タインキルヘ Hans Goldschmied an

29) W. Fischer, *ibid.*, S. 39.

der Theinkirche の許で順調に事が運んで，彼は私を喜んで迎えた。」[30]

故郷ブレスラウの町でまる3年以上も職人として働いていたヴォルフガング・ヴィンツェンツは，金細工親方になる見込は当分ないことを悟って，再度遍歴の旅に立つことにしたのである。この1551年に彼は27歳になった。3人の職人と同行したのは，4年前イタリアから帰って来た時と同様，旅の安全を考えてのことであった。痩せた鼠を飼うとは，貧乏暮らしを表わすこの地方の慣用句であろうし，野原のベット夜空の掛け布団と言うのは，彼のせい一杯気のきいた表現であろう。なお，彼のこの第2回遍歴の旅程は後述に見られる通り，プラハ―フランクフルト―ケルン―ニュルンベルクの順である。

「それから私は別の3人の職人と共にベーメン Böhmen 地方を通ってエゲル Eger へ行き，この旅で別に変わったことはなかった。そこで私は更にフランクフルト・アム・マインに行った。其処は丁度有名な大市の最中で，ベーメン，ポーランド，ハンガリア，フランデルン，ブラバント及びイングランドの商人や行商人が其処へ来た，イタリアとフランスからも大きな荷車と共に到着した。高くつく町であり，宿屋は外国人，商人及びその従者で一杯であったから，私はそれを期待しなかった。」[31] こうしてヴォルフガングはプラハからフランクフルトにやって来たが，大市の最中で，宿も取れなかった。

「だが私は運が良くて，有名な金細工師フィーリプ・ムスラーPhilipp Mußler 親方のところへやって来た。彼は私の図案の技倆がどんなものか直ぐ知りたいと思ったが，それは私の最愛の父が私に若い時に，その後はブレスラウのヴォルフ Wolf 親方がよく勧めたものであった。そして私は画像，紋章，杯，小さな像及び水差しを書いてある私の手帳を示すだけでよく，この誇り高い浅黒い男が仕事場で私をじろじろ見てて，留まるように命じた時，

---

30) W. Fischer, *ibid.*, S. 39.

31) W. Fischer, *ibid.*, S. 39－40.

私はひそかにほくそ笑んだ。この親方はせっせと楽しく仕事に取りかかる若い職人を幾らか我慢でき，主婦のディテレ Dittele はつっけんどんでなく，ふだんは信心深く勤勉な婦人だったので，この家の中は楽しかった。仕事場に仕事は多く休みは少なかった。」[32] ヴォルフ親方とは彼が徒弟に出されたヴォルフガング・ヴェスターマイヤのことであろう。彼は続いてフランクフルト市の金細工需要の大きなことを，こう述べる。

「フランクフルトの金細工師は彼らの作品の良い愛好者を有するが，アウクスブルクのそれとは違っている。其処［アウクスブルク］ではイタリアに旅する全く多くの紳士が値切らずに宝石と銀盤を，また贈物のためにみごとな宝石を買う。だが此処フランクフルトでは外国の商人が金細工師の大きな顧客であって，大市で大量に買うので，多くの金細工師は一つの大市で千グルデン以上の売上がある。此処では金細工師は皆，ハンガリア，ポーランド或るいはフランデルンの紳士が何を欲しがり何が好きかを知っている。……ハンガリア人は金製品を買おうと思い，ベーメン人は大きな宝石の作品を選び，ラインの者は銀の大鉢とワインジョッキを，またイギリス人も彼らの食器棚のためにこれらを求める。だがシュトラースブルクとリューベク Lübeck，またハムブルク Hamburg の者は，小像，葉形飾り及び動物の小ぎれいな作品を選ぶ。そこで私はその時幾度も心中で思った，ああ，だがブレスラウにも精緻な細工物をほしがる多くの人びとが膨らんだ財布を持って来たらなあと。」[33] フランクフルトの貴金属製品の販路は大市における外来商人の大口需要に在った。そして顧客のニーズの特色を調べたヴィンツェンツは，それにつけても故郷ブレスラウの貧弱な需要を嘆くのであった。

「この頃ブレスラウやゲルリツ Görlitz から来た多くの人にも出会って，故郷はどうであるか，また既に 19 人の金細工師が市内にいるので，私にとって

---

32) W. Fischer, *ibid.*, S. 40.

33) W. Fischer, *ibid.*, S. 40.

ブレスラウで親方資格を得る時期ではないだろうということを知った。シュレーズィエンの商人は現在大市において，ケルンとシュトラースブルクの金細工師よりも優れているアウクスブルクとニュルンベルクの親方の金細工作品や宝石を余り買わない。」[34] 遍歴の旅にあってもヴォルフガングの最大の関心事は故郷の町の親方になることであったが，彼が旅先きで得た情報は落胆させるものばかりであった。彼は腹いせに，シュレーズィエンの商人の貴金属製品に対する目がないことを攻撃する。

続いて彼は顧客を3種類に分け，作品の美しさを愛好する者，豪奢な生活の飾りにする者，及び婦人に対する贈物として求める者とする。もちろん第一の者，すなわち「立派な作品を評価する紳士が金細工師の許で最も尊敬される。彼らは宝石の良き精通者であって，彼らの道理にかなった話は喜んで聞かれる。なぜならこういう愛好家と，新旧の金細工作品，ギリシャ及びローマの美術，彫像及び宝石磨き匠の楽しい作品，そして宝石の光輝，エメラルドの区別及びルビーの不均一の輝きの深い秘密などについて語るのは楽しみである。私がこのような短い期間のこうように大きな販売に驚いたところ，古代の学問をよく読んで知っているゼバルドゥス Sebaldus 老親方は，古代には金細工師の許に高価な作品がもっと多く一層豊富にあったと，当時酒場で私に語った。その頃古代の異教徒はローマやギリシャの大理石の神々にエメラルド，柘榴石，サファイア及び琥珀の義眼を造らせた。また古代の異教徒の間にはエメラルドだけの杯を作り上げた多くの貴族の美食家がいたと言うことだ。この老親方は昔遍歴学生だった時ブレスラウにいて，未だ多くのブレスラウの者を知っていたし，大聖堂僧侶について私が聞いていなかった，なお多くの悪行を知っていた。愉快な男で，私を散歩に連れ出して，後でワインを振舞う癖があった。だから私は古代の異教徒の書物からの彼の大きな知識のために喜んで彼のところへ行った。」[35] ここにヴィンツェンツの自分

34) W. Fischer, *ibid.*, S. 40.

35) W. Fischer, *ibid.*, S. 41.

の仕事に対する熱意と誇りが窺われ，特に古代美術に対する崇敬は大きく，ゼバルドゥスのような先輩は彼にとって有り難かったことが分かる。

6

「今や特に上述のアルブレヒト Albrecht 辺境伯の遠征の戦争の苦難が全土に感じられたので，私は多くの美しい町や村を過ぎてラインに移り，或る年老いたけちな銀細工及び鎖師の親方の許で暫く時を待ち，悪い溶融金属を注いだが，幾杯もの良いワインを飲んだ。坩堝の中の銀が白く輝いている中に験査済みの最良の銅だけを少量加える時に最高に固くて柔軟な銀を造るこつを，私は先ずこのよぼよぼに示さなくてはならなかった。また管に正しい熱を加えると銀は特に打ち延ばし易くなる。この老人にはこういうことは待ちきれなかった。」[36]

ヴィンツェンツは彼がフランクフルトからケルン――彼の言うライン――に移った理由をアルブレヒト辺境伯の戦乱としているが，それは次のような政治的背景で生じた。武装帝国議会の次の帝国議会は1550年に同じくアウクスブルクで開かれ，1548年5月15日の「アウクスブルクの暫定措置」„Augsburger Interium“ の促進[37]を等族に勧告する帝国議会最終決定が1551年2月14日に出されたが，プロテスタント等族の強い抵抗の前に実効は望めなかった。1551年3月のカール5世のハープスブルク家の家族契約を[38]，帝冠をバープスブルク家に保持する「残忍なスペイン的屈従」„viehische spainische Servitut“ と受け取ったドイツ諸侯は1551年5月にトルガウ

---

36) W. Fischer, *ibid.*, S. 41－42.

37) 「アントーン・フガーの企業と時代 (20)」101頁。

38) 「アントーン・フガーの企業と時代 (22)」『経済と経営』第18巻，第2号，1987年，106頁。

Torgau で諸侯同盟を結んだ[39]。1551 年 10 月 1 日ザクセン選帝侯モーリツ Moritz の狩猟用別荘で同盟諸侯のフランスに対する接近が謀議された[40]。プロテスタントの乱暴な猪武者であるブランデンブルク＝クルムバハ辺境伯アルブレヒト・アルキビーアデス Markgraf Albrecht Alkibiades von Brandenburg-Kulmbach はシュマルカルデン戦争中は皇帝軍の傭兵隊長として働いていたが，彼の狭い領地の拡大を望んで諸侯同盟に接近した。1552 年 3 月に戦争諸侯ザクセン，ヘセン及びクルムバハはアウクスブルクに進撃し，更にティロールへ向かった。驚いた皇帝はインスブルゥクからフィラハ Villach に逃れた[41]。1552 年 8 月 2 日のパサウ Passau の休戦協定で皇帝と反乱諸侯の間に和解が成立した後も[42]，アルブレヒト・アルキビーアデス辺境伯は盗賊騎士のやり方で勝手に戦争を続けた。彼は免焼金を徴求しながらニュルンベルク，バムベルク Bamberg 及びヴュルツブルク Würzburg の地域を荒らしてエルザス Elsaß へ向かった[43]。

反乱諸侯が皇帝によって守られいるフランクフルトの前面に戦火を拡げたのは 1552 年 7 月のことであるから[44]，ヴィンツェンツがフランクフルトからケルンへ向かったのは 1552 年のことであるようだ。次の戦乱の記述も同じである。「それから私は再びニュルンベルクに引越したが，其処にはアルブレヒト辺境伯も彼の猛禽〔兵士〕と共にいて，多くの村が荒らされ，貧しい人び

39) Horst Rabe, *Reich und Glaubensspaltung, Deutschland 1500－1600* (Neue Deutsche Geschichte, Band 4), 1989, S. 284.

40) 「アントーン・フガーの企業と時代 (23)」『経済と経営』第 18 巻，第 4 号，1988 年，118 頁。

41) 「アントーン・フガーの企業と時代 (23)」130 頁。

42) 「アントーン・フガーの企業と時代 (23)」135 頁。

43) 「アントーン・フガーの企業と時代 (23)」129 頁。1554 年 4 月のザクセン選帝侯のウルム攻撃中，アルブレヒト・アルキビーアデス辺境伯は業をにやして，諸侯と別れて単独の掠奪行に転じた。

44) 「アントーン・フガーの企業と時代 (23)」135 頁。

とは彼らの不幸に対しもう涙も出なかった，何故なら家にやって来た農民傭兵は容赦することなく，自分らが寝るために産婦や病人までも部屋から叩き出した。こうして通り過ぎる至る処に窮乏が宿っていた。そこで私はこの悪い時期にニュルンベルクでよい親方を見つけるのは難かしいだろう，この前もよい親方に会えなかったと思った。また私の兄弟ペトルスがよく言ったことを思い出した，故郷に帰る前にニュルンベルクをよく見ておくべきである，というのは彼はザンクト・ローレンツ St. Lorenz のラテン語学校の教師であった頃からこの町を非常に褒めていた。」[45] これによるとヴォルフガングは以前もニュルンベルクに来たが，良い親方を見つけられなかった。またペトルスはニュルンベルクのザンクト・ローレンツ教会付属のランテ語学校の教師をしていた。兄弟ペトルスの勧めに従って悪い時期のニュルンベルクで良い親方は見つけられまいというヴィンツェンツの不安は，後述のように解消された。

「私はアウクスブルクから有利な手紙を有したので，今度はもう3日目に好意的な親方にうまく会えた，それはイェケル・ホフマン Jäckel Hoffman であった。其処で私は先ずいろいろと簡単な装飾棒を造らなくてはならず，それは間もなく捗って親方の気に入り，職人はそれぞれ一つの作業をするだけなので，鎖，ポット，平たい杯及びその他の作品をより迅速に仕上げることができて，フランクフルトの大市のために間もなく在荷を持つ。ニュルンベルクでは若干の親方は滞在中の職人を好んで出来高仕事で働かせるが，誰もそのことを言わない，何故なら平たい杯を半打ずつ作らせる若干の親方がいるが，こういう利点は不当で手工業に有害と宣告されて，参事会から彼らに処罰意見が吐かれ，罰金を課された。」[46]

「同業組合なき都市」„Stadt ohne Zünfte“ と呼ばれたニュルンベルク市の

---

45) W. Fischer, *ibid.*, S. 42.

46) W. Fischer, *ibid.*, S. 42.

参事会は，その輸出工業の利益のために手工業を厳しく統制した。金細工手工業は30を下らぬ「閉鎖された手工業」„Gesperrte Handwerk“に属し，特に厳しい統制下に置かれていた[47]。ニュルンベルクの工業生産は問屋及び大商人の経済的支配の下に出来高払い生産が普及したが，貴金属製品の生産にあっては，その製品の性質上これが禁止されたものと思われる。ヴィンツェンツはホフマン親方を次のように賞賛する。「私の親方は良い優秀な金細工師で，若い頃オーストリア，フランデルン及びフランスで働き，彼の職務の推進に大いに励み，いろいろな良い技術も知っていた。ところで怠け者の職人をやがてやる気にさせて町からなくしたのはイェケル・ホフマン親方であった。だが私は合金の技術によって最も硬い金線を作ることができたので彼に気に入られた。また彼の仕事場には美しい作品の精巧な鉛の型が見られ，他の金細工師の許では見られぬようなものであった。……この親方は溶解作業の彼の秘密を守り，更に紋章及び印章彫りや美術的小像でみごとに鋳造することができた。だがこういうことは見て習得できるものでなく，親方は彼の驚くべき熟練を生れつき有した。」[48]

7

「ニュルンベルク市があらゆる国からやって来た多くの人びとを持つ，何という優雅で巧みで豊かな町であるかは，ニュルンベルクに来たすべてのブレスラウ人によく知られている。其処では若い職人は見たり聞いたりするものがうんざりする程多いので，過剰なこういうものから身を守らなくてはならぬ程だ，というのはさもないと彼はやがて彼の技術から外れてしまうからだ。」[49] このようにニュルンベルクを賛美するヴィンツェンツは，この町で得

47) Eberhard Isenmann, *Die deutsche Stadt im Spätmittelalter,* 1988, S. 38−39.

48) W. Fischer, *ibid.*, S. 42−43.

49) W. Fischer, *ibid.*, S. 43−44.

た1人の注目すべき友人のことを詳しく記す。「ところで私はミヒャエル・バイヤーMichael Baierという良い職人と初めて親しくなった。彼はシュトラースブルクやフランスを見て回り，いろいろと遍歴した。彼はブレスラウの低音歌手バムハルト Bamhart のような声を持っていた。彼の性格はふだん気むずかし屋でなかったが，しっかりした賢明な職人で，曾て画法を習い，その後ニュルンベルクのイェルク・ペンツ Jörg Penz 親方の許で職人だった。この親方は立派なよい親方で，彼が忠実に描いたさまざまなお偉方の勤勉な肖像画家であった。聖書の物語，聖女や美しい異教徒の女性の美しい挿絵も描いたが，到頭全くの貧窮の中で死んだ。さてミヒャエル・バイヤーはこの老親方から，極めて奇麗な金銀細工にもガラスを熱して描く技術を学んだので，私は太陽が彼の描いた金の鎖とガラスに全く現実に映っていると思って，それに驚いた。」[50] ここで触れられているイェルク・ペンツはアルブレヒト・デューラーAlbrecht Dürer の弟子のゲオルク・ペンツ Georg Pencz のことである[51]。

「だがこのミヒャエルは特に音楽の愛好者で，多くの若い職人が周りに集まった。彼はよくこう言った，以前バーゼルでよい前例を知っている，と。……こうして折にふれて集まり，また日曜日には何処かへ散策することが決められた。そして辺境伯の焼き払うままにされたこの帝国林には多くの美し

---

50) W. Fischer, *ibid.*, S. 44.

51) ペンツは1500年頃に生まれ，デューラーの徒弟として彼の家にいた。デューラーの記録によると，ニュルンベルクの市庁会広間の古代をテーマとした壁画を1522年に仕上べた。1525年に異端的発言で参事会から尋問され，追放されたが，同年中に帰国を許され，1532年には市の御用画家に任命された。1550年東プロイセンへの旅行中に死んだが，アルブレヒト公が彼を宮廷画家としてケーニヒスベルク Königsberg に招いたからであった。Gerhard Pfeiffer, *Nürnberg-Geschichte einer europäischen Stadt,* 1982, S. 155, 261−262 ; G. Pfeiffer, *Geschichte Nürnbergs in Bilddokumenten,* 1970, S. 46−47.

い空地があり，其処へ夏には女性，男性及び子供が行って遊ぶ。其処へわれわれは時折皆で一緒に行くのが常で，正しい真の兄弟団で，特に金細工師，彫版師，彫刻鋳造師，書記，学生，書籍行商人及び印刷工がその中にいた。そしてわれわれは日曜日毎に早朝遠く出かけて，歌とラウテ弾奏の密集した群れをなして進んだ。それから梨酒を飲むため美しい果樹園に坐わった。……ところで全く多くの者がわれわれの兄弟団に入りたいと望んだので，彼らが全く仲間及び兄弟の約束を受ける前に彼らの人づき合いの良さを証明する試験を，2人以下の者が新来者にすることにし，こうして利己的で不機嫌なあら探しの好きな者や信心ぶったカトリック教徒が来ないようにし，誰かが真実からあまりはずれたり，その話しに嘘を吐こうとしたことが全くはっきりした時も同様にされた。」[52] われわれはここに，或る社会集団の生き生きした姿を見ることができる。

「それゆえ要するに人づき合いがよく，全く一致できる者だけが，われわれの許に来た。だから不和は生じなかった。そういうわけでわれわれは週に2回，歌とラウテ弾奏と共にワイン酒場に行って，各自少量を罰として持たされ，その後再び歌と共に酒卓を離れた。それなのにわれわれはニュルンベルクの他の職人たちに幾らか妬まれた，というのはわれわれの兄弟団のみごとな登場と退場が彼らの目について，彼らは邪魔したく思ったようだ。ところでこういう誇らし気な群を成しての登場は融通のきかぬ参事会にも悪く取られて，背後に隠れた不穏の意図を探った。その時参事会の1人の書記がひそかにわれわれに知らせたところによると，われわれは5人法廷に出頭し，ワインは速かにわれわれをひどい目に会わせ，われわれの兄弟団は解散さるべしということであった。ところでこの不快な件を相談しようと思い，アンケートを取ったところ，或る者はこう言い他の者は別の主張をした。ミヒェル Michel は言った，愛する兄弟たちよ，参事会とは何ぞや？われわれは反抗

52) W. Fischer, *ibid.*, S. 44－45.

して防衛すべきか？それは適当でないだろう，何故なら彼らはわれわれに実力行使をするだろう。」[53] この難局を打開するためにヴィンツェンツたちの兄弟団は一計を案じた。

「そこでわれわれは今度は再び夕方から出かけて，2人の上品な美しい娘を持った或る参事会員の家の前に赴いて，其処で極めて魅力的な優しい音楽を奏し，ドイツ，フランス及び幾つかのイタリアの甘い小唄を歌った，というのはアウクスブルクとニュルンベルクでは商人は皆外国語が分かるからだ。するとわれわれの音楽が余りに優しく美しいので，あらゆる窓や戸口から人びとが老いも若きも街に溢れ出た。老参事会員は驚いて尋ねさせた，一体どういうわけか？われわれは言った，これはニュルンベルクが非常に美しく敬虔な町でありまして，ここでの暮らしがわたくし共に非常に快いことに対する感謝の印しであります。わたし共は参事会員方に都合のよい時にお許しを得て，お慰みのためこういう音楽を演奏することに決めました，と。そこで参事会員は粗野な風潮のこの時代にこういう愛すべき上品な風習に兄弟団が勤しんでいることに驚いて，皆に話しかけ，われわれを次回にも彼の美しい楽しい庭に招いた。要するに彼の2人の美しい娘が彼女らの父を，そして彼を通じて全参事会をわれわれに好意的にさせた。そしてわれわれは別の参事会員のところへ行ったが，彼らの中にけちな者は稀だった。彼らはわれわれにワインを贈り，そしてわれわれは平気で悩まされずに，すばらしいラウテで愛の歌の愛らしい響き，活発な旅の歌及び美しい宗教歌のために，好きな所に集団で行くことができた。」[54] このほほ笑ましい出来事の叙述を以て，ヴィンツェンツの遍歴時代の記録は終わる。

1553年のヴィンツェンツの記録には，彼が故郷に帰って来て，ヤーコプ・ベルガーJakob Berger親方の許で職人となったこと，マクダレーネ Magda-

---

53) W. Fischer, *ibid.*, S. 45. ミヒェルとは前述のミヒャエルのことであろう。

54) W. Fischer, *ibid.*, S. 46.

leneを妻に迎えたく思っていることが記される。1554年にには，美しい春なのに親方になれぬだろうという大きな心配を抱いていること，だが幸運の夢を見て老ハニシュ博士はこれを将来の変化の前兆だと言ったことが記される。とにかくヴォルフガングは親方作品に取りかかり，3か月足らずで仕上げて，資格試験に合格した。そして11月25日にマクダレーネと結婚した。1564年に彼はブレスラウのオーリシュ通りOhlische Gasseの古い家を購入して，これを改築した。最後の1583年の記録にはこう記されている。「さて今では私の婿が多くの仕事をしてくれるので，私は彼に私のすべての技術上の秘密を教えた。だがよくあることだが，若い者は老人から余り学ぶことはできず，むしろすべての困難な作業，技術，知識，規定を自分で切り抜けられると思い誤り，こうして彼らは半分しか或いは全然達成できない。だが私は大きくなった後に私の2人の子供と孫たちが，至高の神の援助で，彼らの先祖と同じく人世の闘いと危険に立派に堪えることを希望する。だがこういうことが最もよく生ずるのは，家庭において若い者が常に老人の傍で育てられて，老人が死んだ後にそれを範とする処である。」[55] ヴォルフガングは次の感想を記して彼の記録を閉じた。「さて今や私の人生は死に近づき，若い時の考えは過ぎ去り，多くは全く消え失せたが，最近はよくあるように古い経験を重んじないことが多いので，私は私の子供たちは結局私の経験から余り利益を受けないことを心配する。」[56]

——1991年3月——

55) W. Fischer, *ibid.*, S. 54－55.

56) W. Fischer, *ibid.*, S. 55.